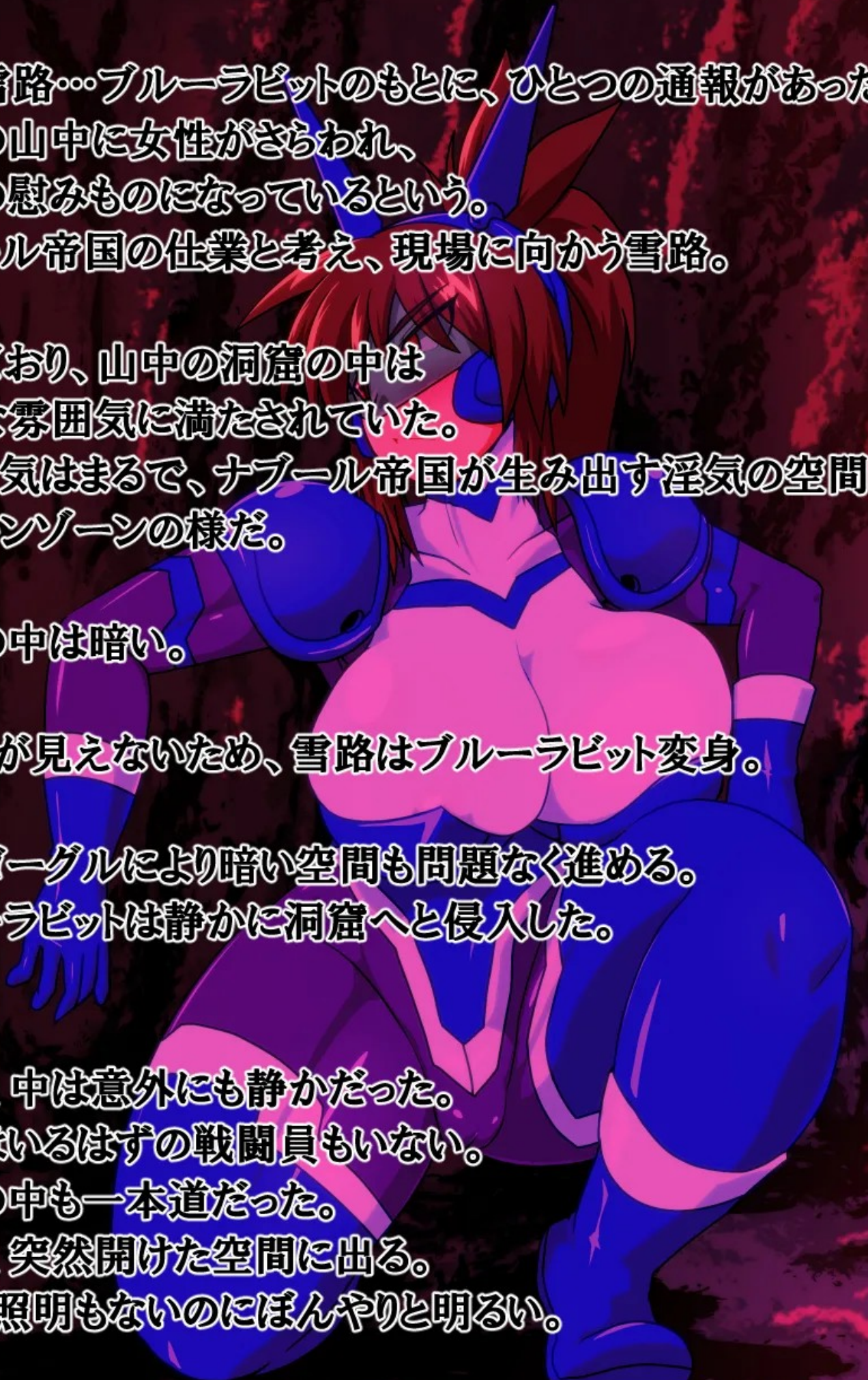


獣換
ビーストファイター
SP03







鞠井雪路…ブルーラビットのもとに、ひとつの通報があった。
山奥の山中に女性がさらわれ、
怪物の慰みものになっているという。
ナブール帝国の仕業と考え、現場に向かう雪路。

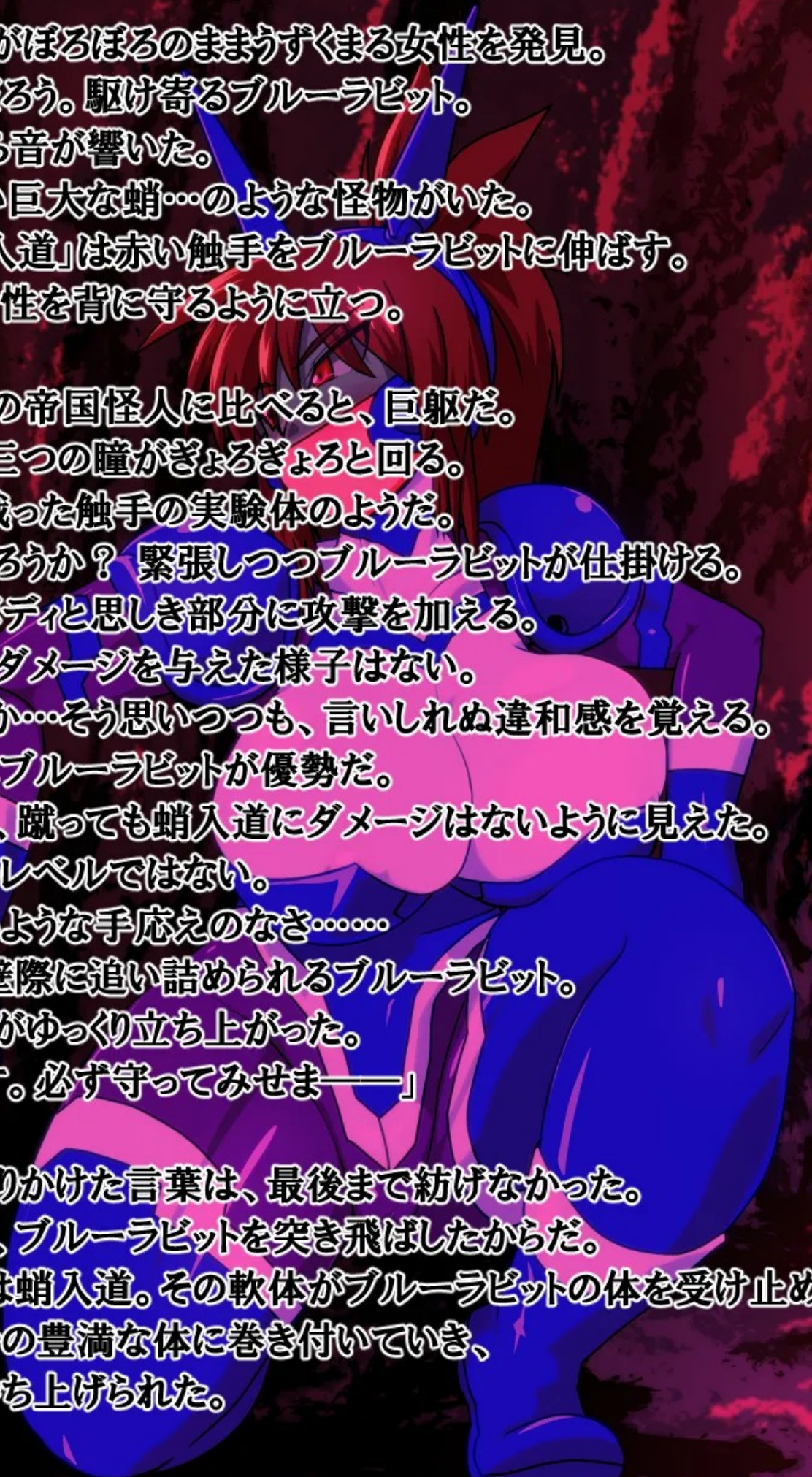
通報どおり、山中の洞窟の中は
異様な雰囲気満たされていた。
その空気はまるで、ナブール帝国が生み出す淫気の空間…
ガオンゾーンの様だ。

洞窟の中は暗い。

全く前が見えないため、雪路はブルーラビット変身。

特殊ゴーグルにより暗い空間も問題なく進める。
ブルーラビットは静かに洞窟へと侵入した。

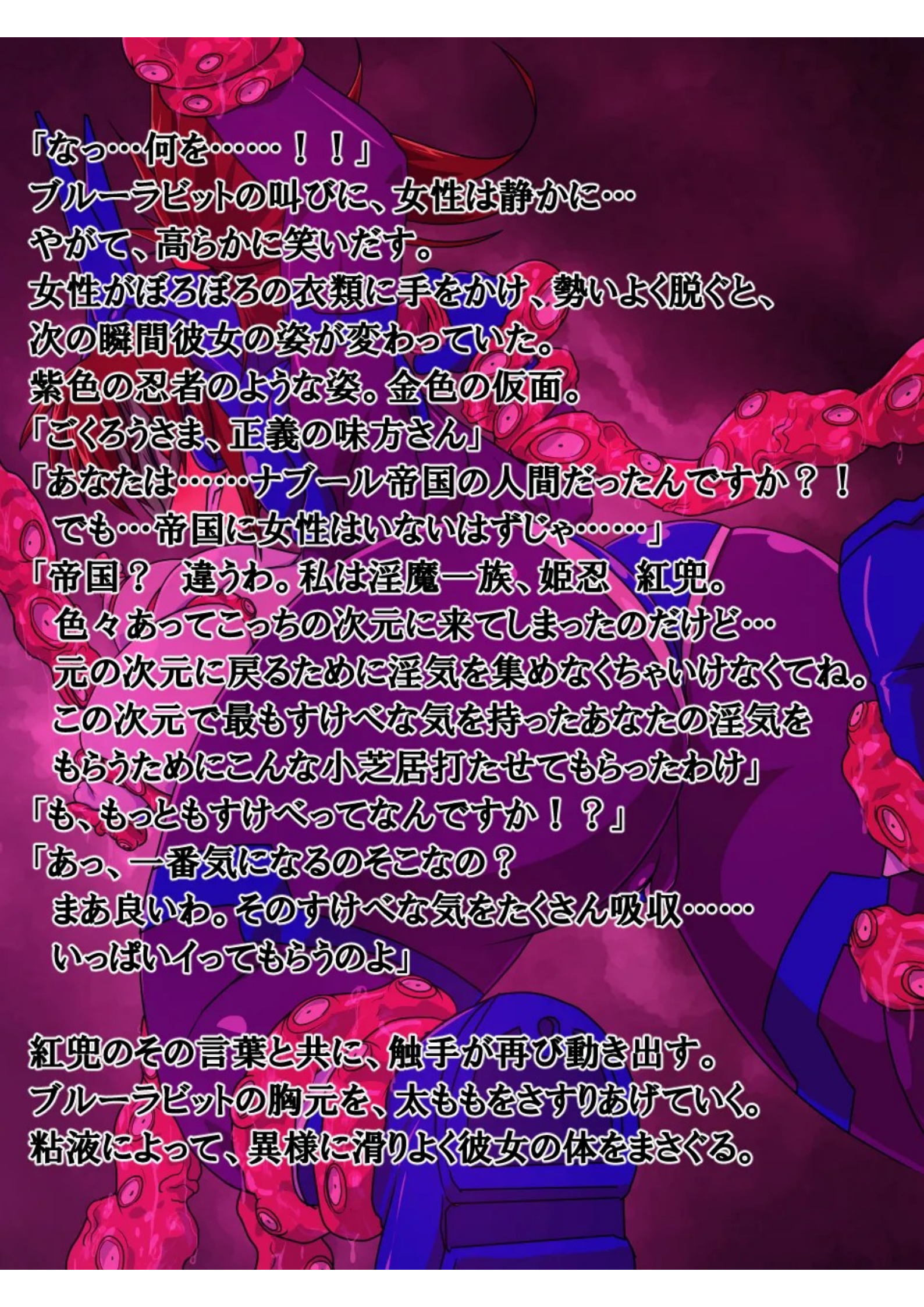
しかし、中は意外にも静かだった。
普段はいるはずの戦闘員もいない。
洞窟の中も一本道だった。
しかし、突然開けた空間に出る。
そこは照明もないのにぼんやりと明るい。



壁の隅に、衣服がぼろぼろのままうずくまる女性を発見。
被害者の女性だろう。駆け寄るブルーラビット。
その時、頭上から音が響いた。
見上げると、赤い巨大な蛸…のような怪物がいた。
その怪物…「蛸入道」は赤い触手をブルーラビットに伸ばす。
それをかわし、女性を背に守るように立つ。

蛸入道はいつもの帝国怪人に比べると、巨軀だ。
巨大な頭につく三つの瞳がぎよるぎよると回る。
まるでいつそや戦った触手の実験体のような。
その完成体だろうか？ 緊張しつつブルーラビットが仕掛ける。
触手をいなし、ボディと思しき部分に攻撃を加える。
のけぞるものの、ダメージを与えた様子はない。
軟体だからなのか…そう思いつつも、言いしれぬ違和感を覚える。
何手かの攻防はブルーラビットが優勢だ。
しかし、何度殴り、蹴っても蛸入道にダメージはないように見えた。
軟体だからというレベルではない。
まるで、霞を殴るような手応えのなさ……
次第にじりじりと壁際に追い詰められるブルーラビット。
背後にいる女性がゆっくり立ち上がった。
「だ、大丈夫です。必ず守ってみせま——」

女性に向けて語りかけた言葉は、最後まで紡げなかった。
守るべき女性が、ブルーラビットを突き飛ばしたからだ。
当然、その先には蛸入道。その軟体がブルーラビットの体を受け止める。
そして、触手がその豊満な体に巻き付いていき、
彼女は中空に持ち上げられた。



「なっ…何を……！！」

ブルーラビットの叫びに、女性は静かに…

やがて、高らかに笑いだす。

女性がぼろぼろの衣類に手をかけ、勢いよく脱ぐと、

次の瞬間彼女の姿が変わっていた。

紫色の忍者のような姿。金色の仮面。

「ごくろうさま、正義の味方さん」

「あなたは……ナブール帝国の人間だったんですか？！

でも…帝国に女性はいないはずじゃ……」

「帝国？ 違うわ。私は淫魔一族、姫忍 紅兜。

色々あってこっちの次元に来てしまったのだけど…

元の次元に戻るために淫気を集めなくちゃいけないわね。

この次元で最もすけべな気を持ったあなたの淫気を

もらうためにこんな小芝居打たせてもらったわけ」

「も、もっともすけべってなんですか！？」

「あっ、一番気になるのそこなの？

まあ良いわ。そのすけべな気をたくさん吸収……

いっぱいイってもらうのよ」

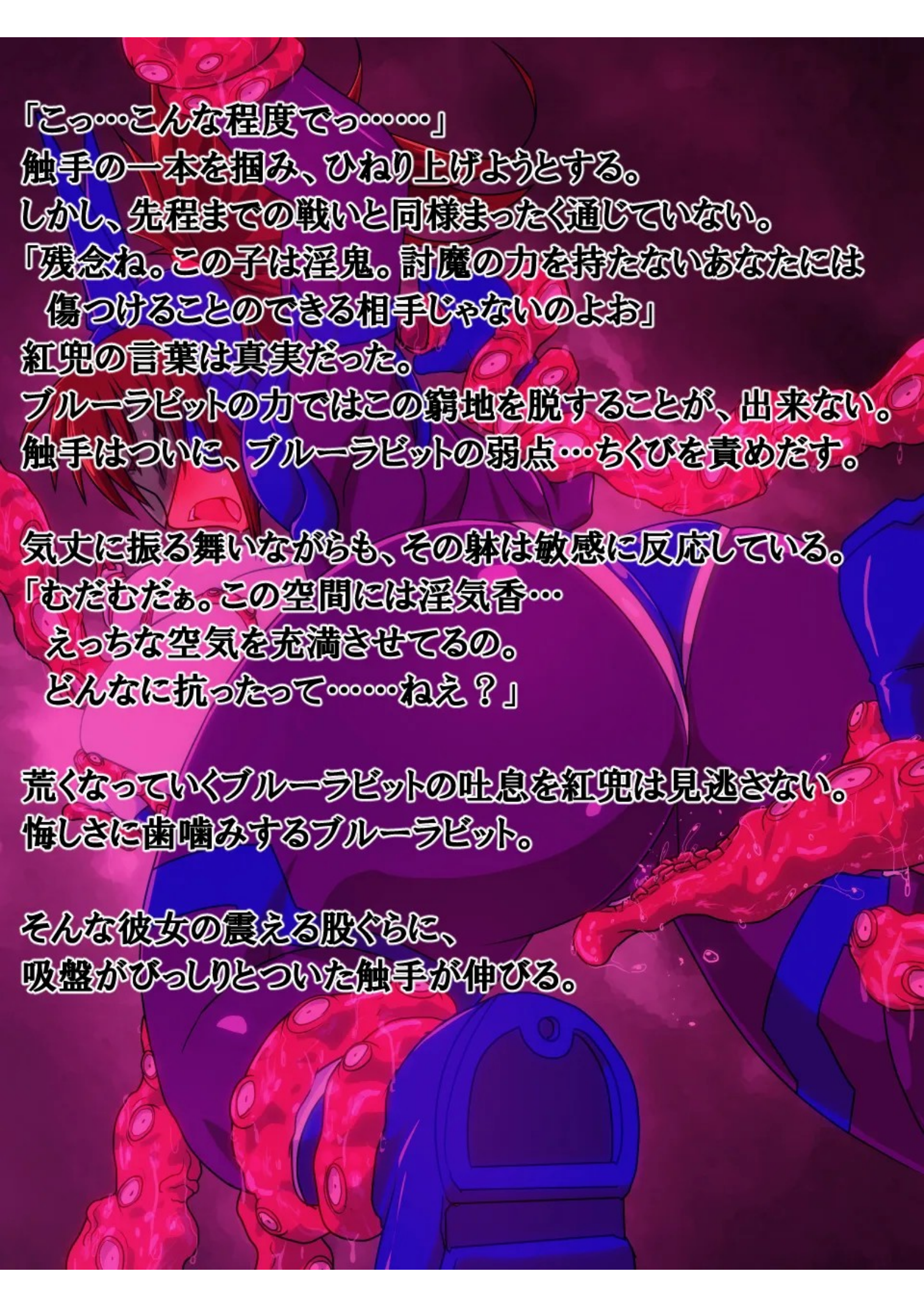
紅兜のその言葉と共に、触手が再び動き出す。

ブルーラビットの胸元を、太ももをさすりあげていく。

粘液によって、異様に滑りよく彼女の体をまさぐる。

放しな…
さい……っ!!





「こっ…こんな程度でっ……」

触手の一本を掴み、ひねり上げようとする。

しかし、先程までの戦いと同様まったく通じていない。

「残念ね。この子は淫鬼。討魔の力を持たないあなたには
傷つけることのできる相手じゃないのよお」

紅兜の言葉は真実だった。

ブルーラビットの力ではこの窮地を脱することが、出来ない。

触手はついに、ブルーラビットの弱点…ちくびを責めだす。

気丈に振る舞いながらも、その軀は敏感に反応している。

「むだむだぁ。この空間には淫気香…

えっちな空気を充満させてるの。

どんなに抗ったって……ねえ？」

荒くなっていくブルーラビットの吐息を紅兜は見逃さない。

悔しさに歯噛みするブルーラビット。

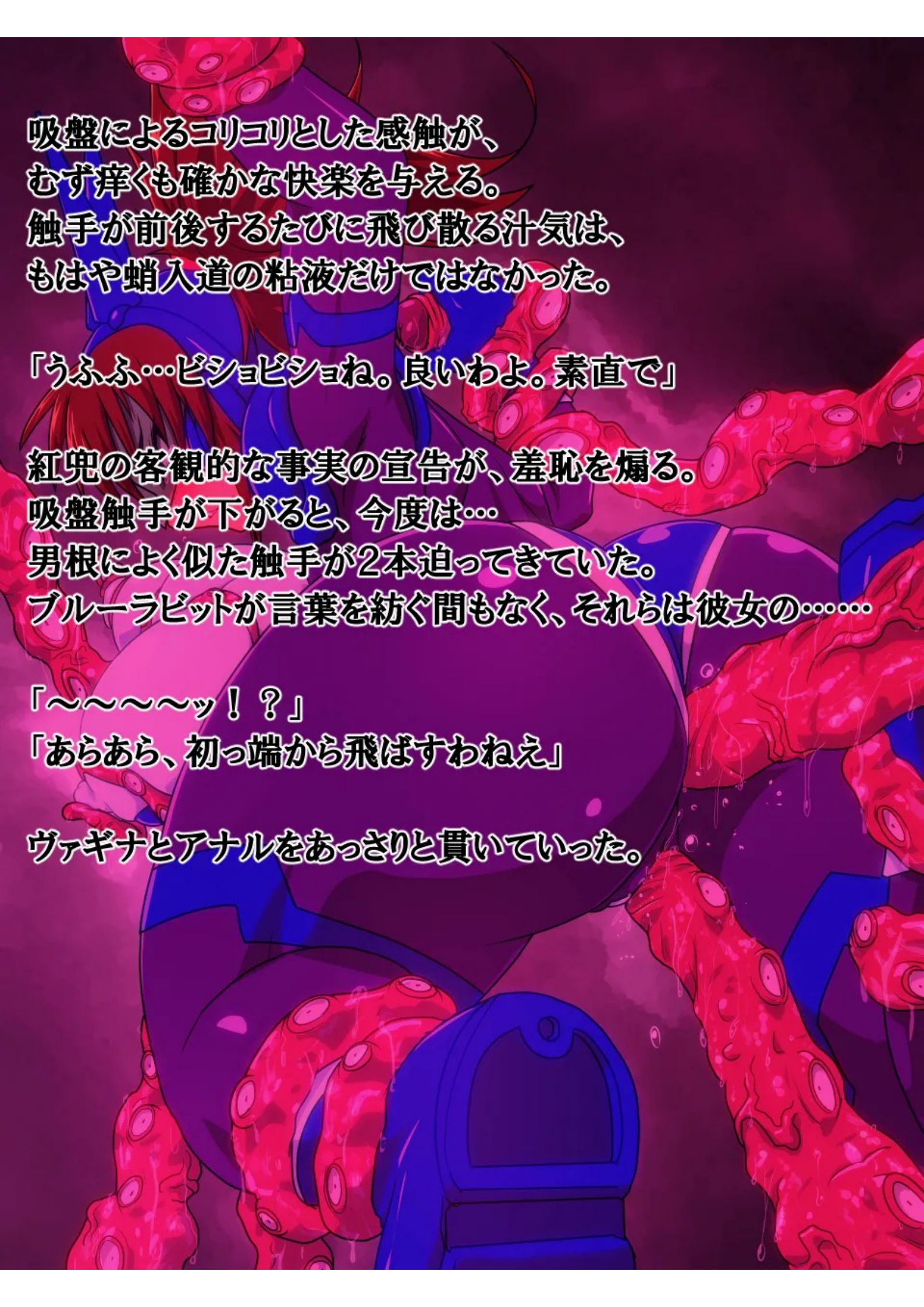
そんな彼女の震える股ぐらに、

吸盤がぴっしりとついた触手が伸びる。

あうっ…
や…めっ…

あああっ♡



A blue-skinned character with red tentacles is shown from the waist up. The tentacles are thick and have small, circular openings. They are reaching out towards the character's head. The background is a dark, reddish-purple color.

吸盤によるコリコリとした感触が、
むず痒くも確かな快楽を与える。
触手が前後するたびに飛び散る汁気は、
もはや蛸入道の粘液だけではなかった。

「うふふ…ビショビショね。良いわよ。素直で」

紅兜の客観的な事実の宣告が、羞恥を煽る。
吸盤触手が下がると、今度は…
男根によく似た触手が2本迫ってきていた。
ブルーラビットが言葉を紡ぐ間もなく、それらは彼女の……

「~~~~ッ！？」

「あらあら、初っ端から飛ばすわねえ」

ヴァギナとアナルをあっさりと貫いていった。





あ
っ

う
あ
っ

ガッ

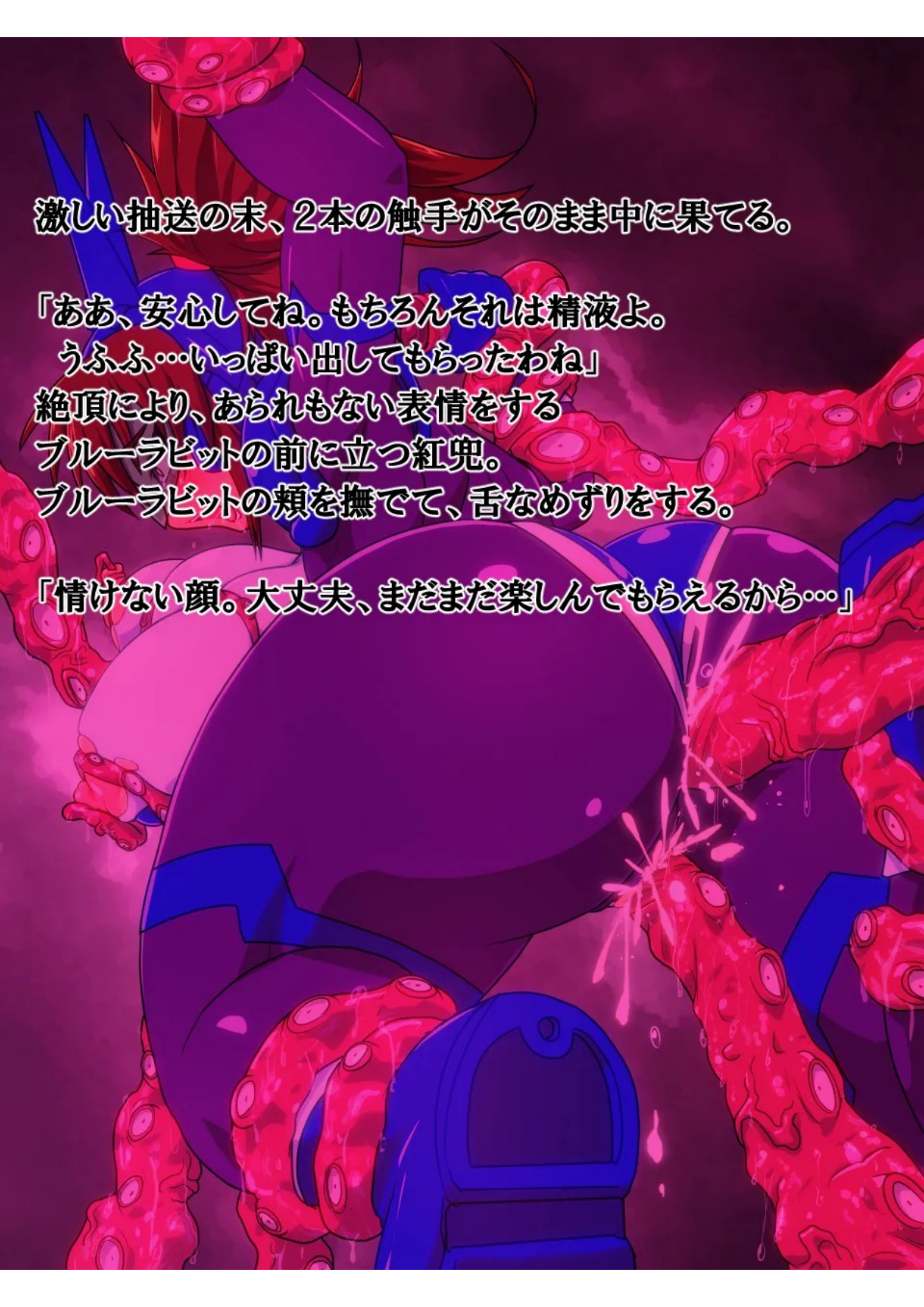
ガッ

ど
ろ
ろ

が
っ
っ

ど
ろ
ろ

っ



激しい抽送の末、2本の触手がそのまま中に果てる。

「ああ、安心してね。もちろんそれは精液よ。

うふふ…いっぱい出してもらったわね」

絶頂により、あられもない表情をする

ブルーラビットの前に立つ紅兜。

ブルーラビットの頬を撫でて、舌なめずりをする。

「情けない顔。大丈夫、まだまだ楽しんでもらえるから…」



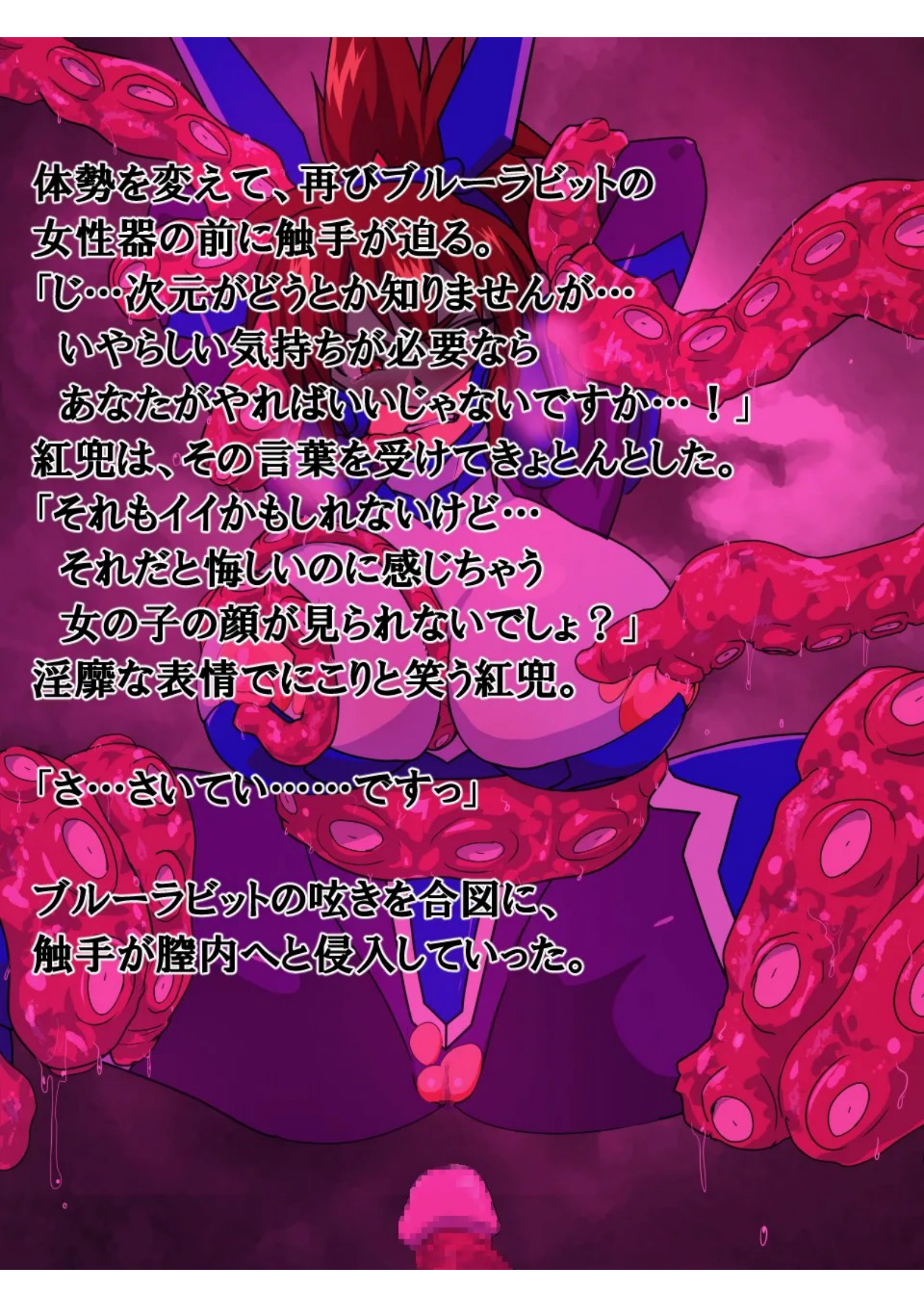
い...いい加減に...
放してくださいっ...

ちび

ぐわ

ぐわ

ぐわ



体勢を変えて、再びブルーラビットの
女性器の前に触手が迫る。

「じ…次元がどうか知りませんが…

いやらしい気持ちが必要なら

あなたがやればいいじゃないですか…！」

紅兜は、その言葉を受けてきょとんとした。

「それもイイかもしれないけど…

それだと悔しいのに感じちゃう

女の子の顔が見られないでしょ？」

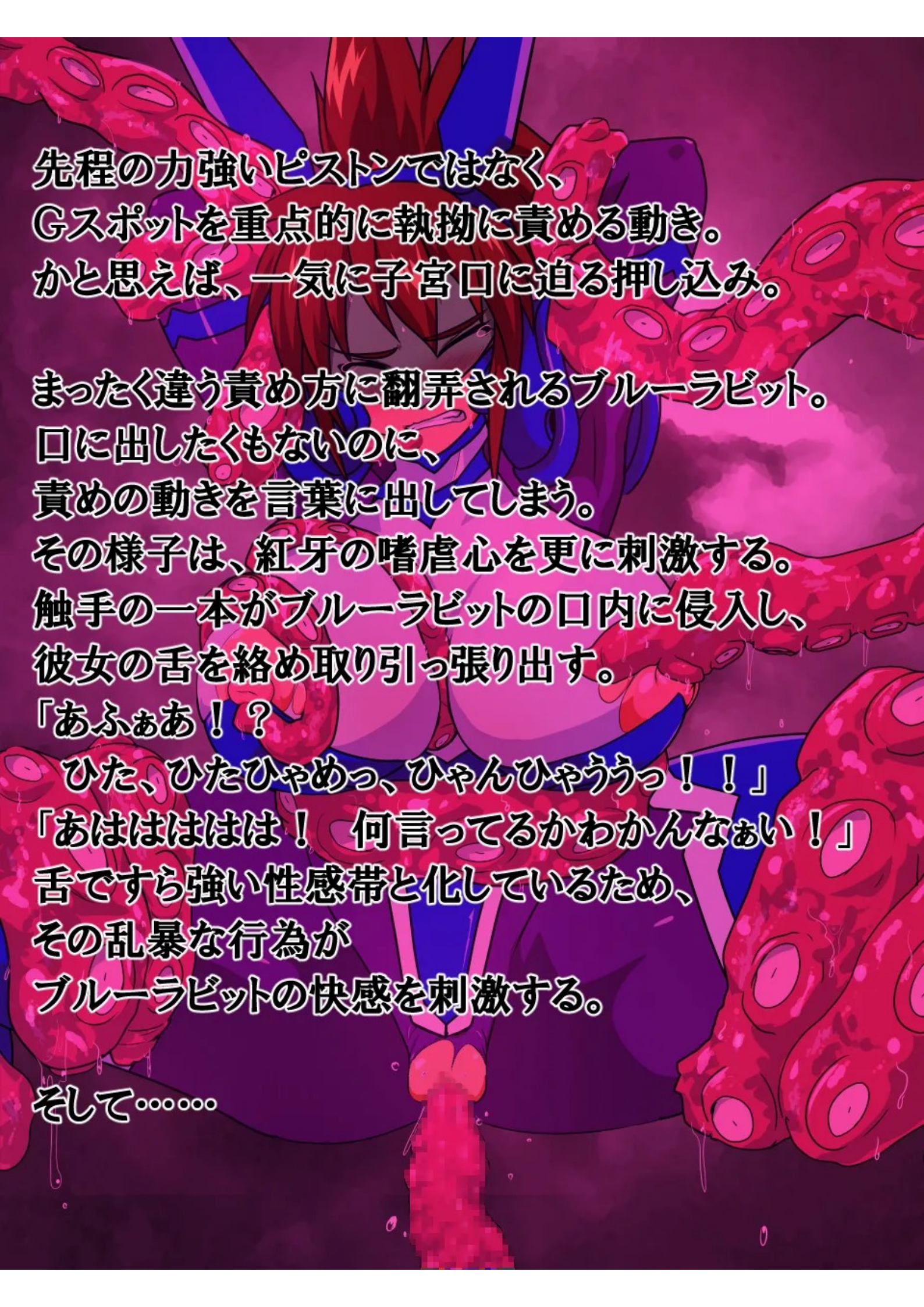
淫靡な表情でにこりと笑う紅兜。

「さ…さいてい……ですっ」

ブルーラビットの呟きを合図に、

触手が膣内へと侵入していった。





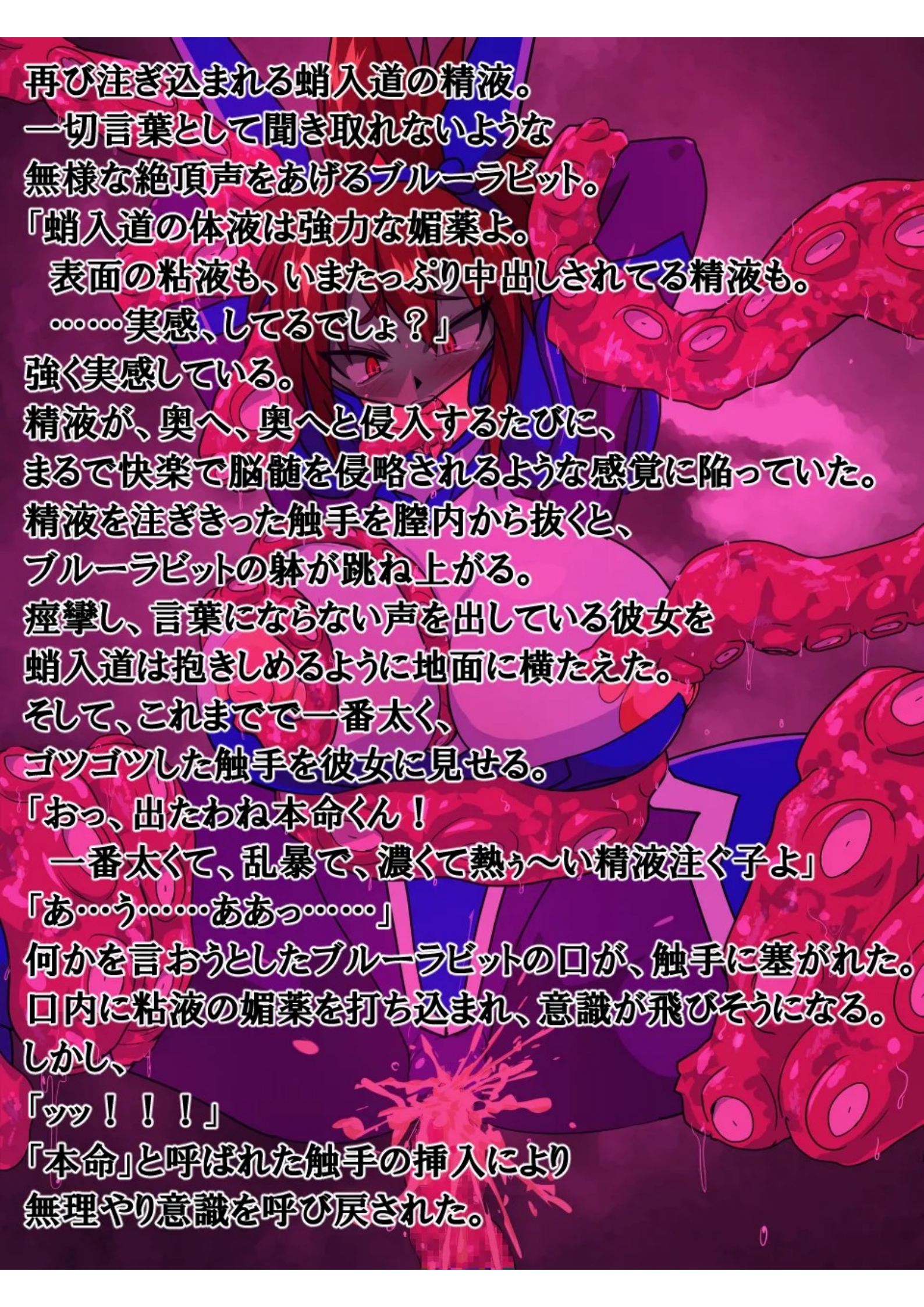
先程の力強いピストンではなく、
Gスポットを重点的に執拗に責める動き。
かと思えば、一気に子宮口に迫る押し込み。

まったく違う責め方に翻弄されるブルーラビット。
口に出したくもないのに、
責めの動きを言葉に出してしまう。
その様子は、紅牙の嗜虐心を更に刺激する。
触手の一本がブルーラビットの口内に侵入し、
彼女の舌を絡め取り引っ張り出す。
「あふぁあ！？

ひた、ひたひゃめっ、ひゃんひゃううっ！！」
「あははははは！ 何言ってるかわかんない！」
舌ですら強い性感帯と化しているため、
その乱暴な行為が
ブルーラビットの快感を刺激する。

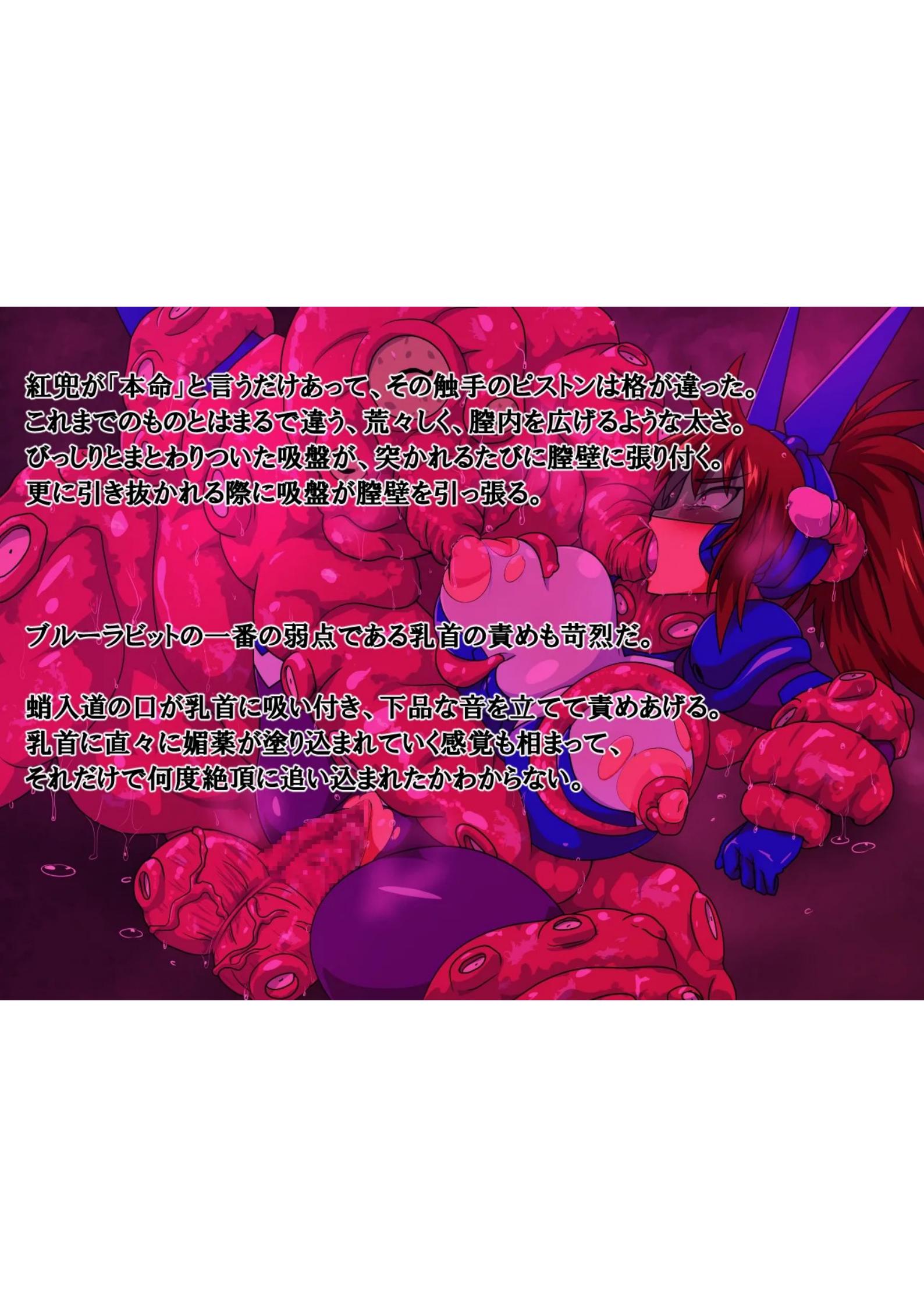
そして……





再び注ぎ込まれる蛸入道の精液。
一切言葉として聞き取れないような
無様な絶頂声をあげるブルーラビット。
「蛸入道の体液は強力な媚薬よ。
表面の粘液も、いまたっぷり中出しされてる精液も。
……実感、してるでしょ？」
強く実感している。
精液が、奥へ、奥へと侵入するたびに、
まるで快楽で脳髄を侵略されるような感覚に陥っていた。
精液を注ぎきった触手を膣内から抜くと、
ブルーラビットの躰が跳ね上がる。
痙攣し、言葉にならない声を出している彼女を
蛸入道は抱きしめるように地面に横たえた。
そして、これまでで一番太く、
ゴツゴツした触手を彼女に見せる。
「おっ、出たわね本命くん！
一番太くて、乱暴で、濃くて熱う〜い精液注ぐ子よ」
「あ…う……あぁっ……」
何かを言おうとしたブルーラビットの口が、触手に塞がれた。
口内に粘液の媚薬を打ち込まれ、意識が飛びそうになる。
しかし、
「ツツ！！！」
「本命」と呼ばれた触手の挿入により
無理やり意識を呼び戻された。



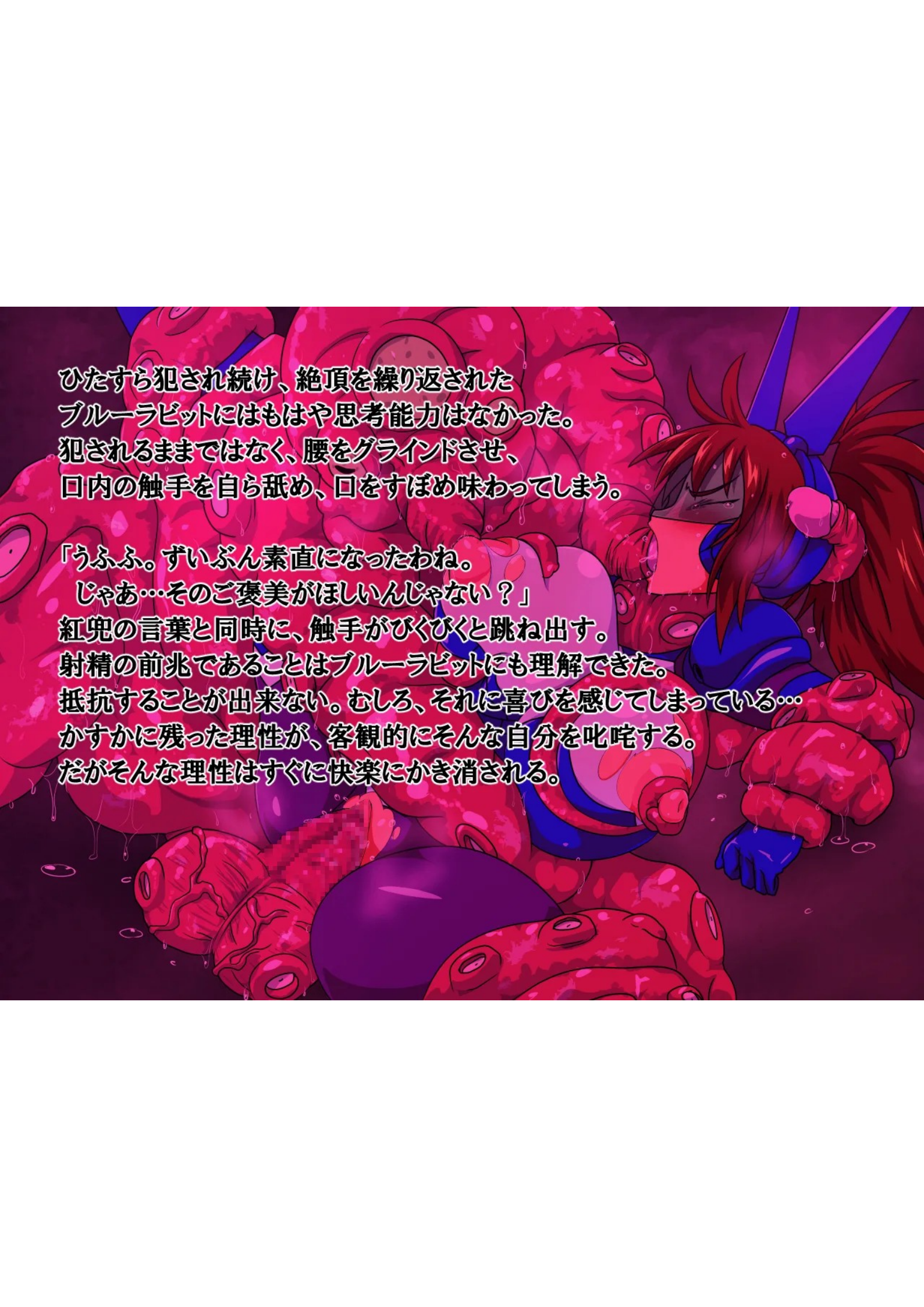


紅兜が「本命」と言うだけあって、その触手のピストンは格が違った。
これまでのものとはまるで違う、荒々しく、腔内を広げるような太さ。
びっしりとまとわりついた吸盤が、突かれるたびに腔壁に張り付く。
更に引き抜かれる際に吸盤が腔壁を引っ張る。

ブルーラビットの一番の弱点である乳首の責めも苛烈だ。

蛸入道の口が乳首に吸い付き、下品な音を立てて責めあげる。
乳首に直々に媚葉が塗り込まれていく感覚も相まって、
それだけで何度絶頂に追い込まれたかわからない。





ひたすら犯され続け、絶頂を繰り返された
ブルーラビットにはもはや思考能力はなかった。
犯されるままではなく、腰をグラインドさせ、
口内の触手を自ら舐め、口をすぼめ味わってしまう。

「うふふ。ずいぶん素直になったわね。

じゃあ…そのご褒美がほしいんじゃない？」

紅兜の言葉と同時に、触手がびくびくと跳ね出す。

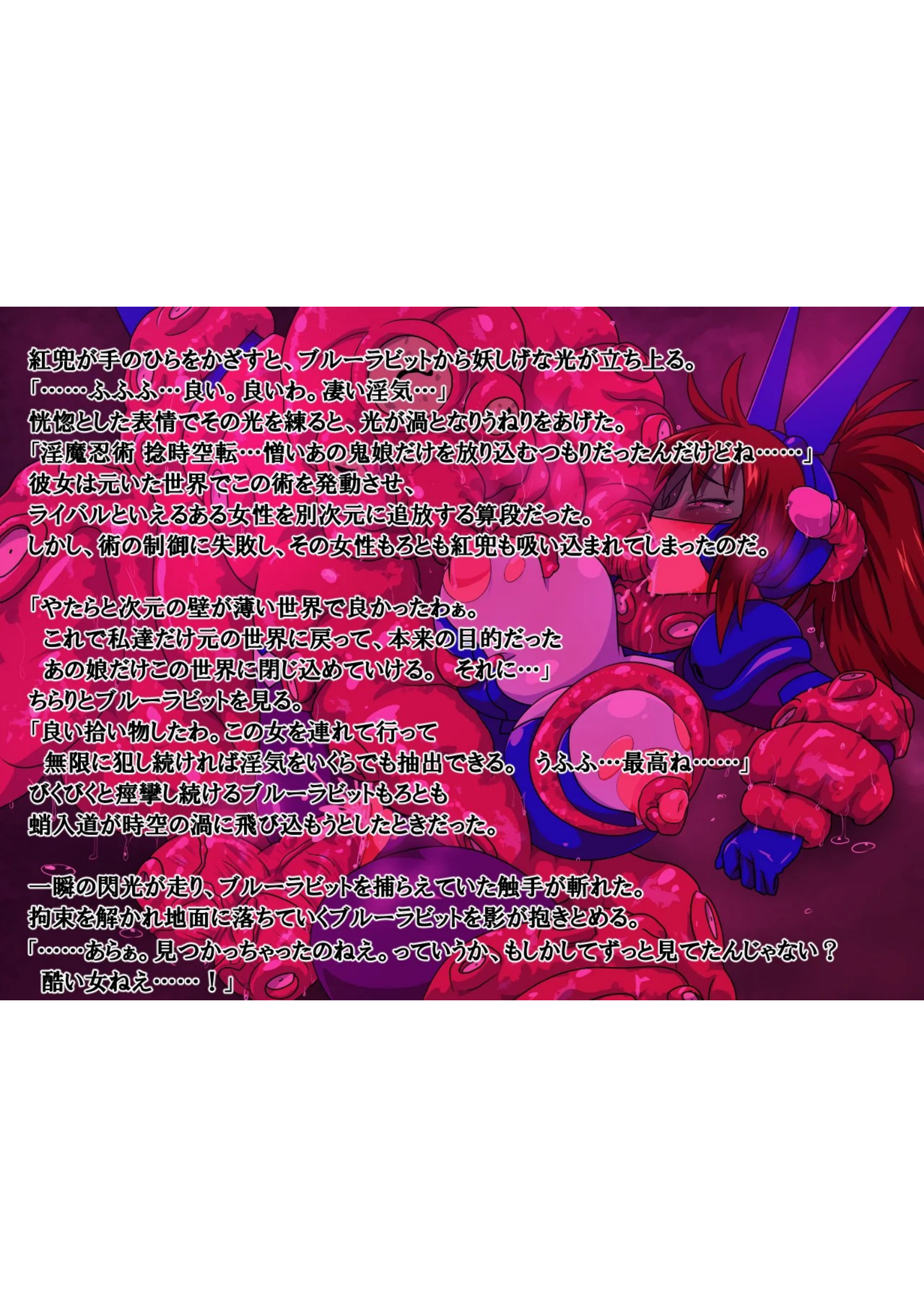
射精の前兆であることはブルーラビットにも理解できた。

抵抗することが出来ない。むしろ、それに喜びを感じてしまっている…

かすかに残った理性が、客観的にそんな自分を叱咤する。

だがそんな理性はすぐに快楽にかき消される。





紅兜が手のひらをかざすと、ブルーラビットから妖しげな光が立ち上る。

「……ふふふ…良い。良いわ。凄い淫気…」

恍惚とした表情でその光を練ると、光が渦となりうねりをあげた。

「淫魔忍術 捻時空転…憎いあの鬼娘だけを放り込むつもりだったんだけどね……」

彼女は元いた世界でこの術を発動させ、

ライバルといえるある女性を別次元に追放する算段だった。

しかし、術の制御に失敗し、その女性もろとも紅兜も吸い込まれてしまったのだ。

「やたらと次元の壁が薄い世界で良かったわぁ。

これで私達だけ元の世界に戻って、本来の目的だった

あの娘だけこの世界に閉じ込めていける。それに…」

ちらりとブルーラビットを見る。

「良い拾い物したわ。この女を連れて行って

無限に犯し続ければ淫気をいくらでも抽出できる。 うふふ…最高ね……」

びくびくと痙攣し続けるブルーラビットもろとも

蛸入道が時空の渦に飛び込もうとしたときだった。

一瞬の閃光が走り、ブルーラビットを捕らえていた触手が斬れた。

拘束を解かれ地面に落ちていくブルーラビットを影が抱きとめる。

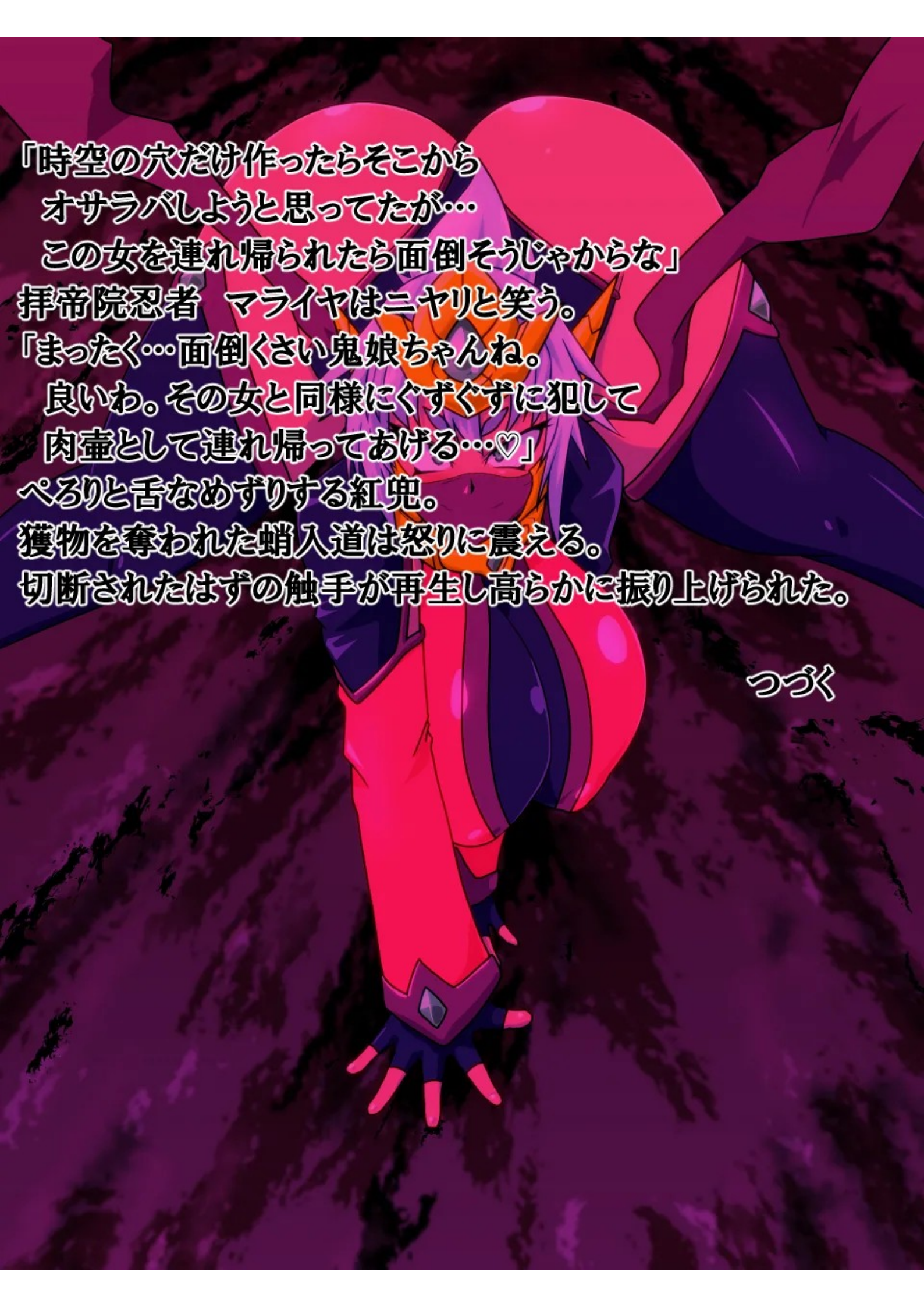
「……あらぁ。見つかったちゃったのねえ。っていうか、もしかしてずっと見てたんじゃない？

酷い女ねえ……！」

拜帝院忍者

マライヤ推参





「時空の穴だけ作ったらそこから
オサラバしようと思ってたが…
この女を連れ帰られたら面倒そうじゃからな」
拝帝院忍者 マライヤはニヤリと笑う。
「まったく…面倒くさい鬼娘ちゃんね。
良いわ。その女と同様にぐずぐずに犯して
肉壺として連れ帰ってあげる…♡」
ぺろりと舌なめずりする紅兜。
獲物を奪われた蛸入道は怒りに震える。
切断されたはずの触手が再生し高らかに振り上げられた。

つづく











































